



第 51 号

2017年10月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/株昭和堂

現代を読み解くキーワード

「ダイバーシティ」とは？

佐賀大学ダイバーシティ推進室・室長 城戸瑞穂教授インタビュー

皆さんは「ダイバーシティ」という言葉を聞いたことがあるだろうか。直訳すれば「多様性」であるが、年齢、性別、国籍、人種、障がいの有無など、様々な要素によって構成される。それらを尊重しつつ理解し、個人が差別されることなく最大限の力を発揮できる環境づくりが求められているが、佐賀大学ではどのような活動がなされているのだろうか。そこで、本学におけるダイバーシティ推進業務の中心として活躍されている城戸教授にお話を伺った。

まず、ダイバーシティ推進室の役割を教えてください。

私たちの目的は、老若男女・国籍などを問わず、皆が活き活きと力を発揮できる教育・研究現場の実現です。これまで鍋島地区では、吉田和代先生（佐賀医大5期生、卒後臨床研修センター准教授）が中心となって、県女性医師支援事業SAGAJOYなど女性医師のキャリア継続に関する取

り組みが進んできました。大学医学部の組織が必要との考えから、昨年9月に医学部長を委員長とする医学部ダイバーシティ推進委員会を設置し、活動を開始しています。また、本年度は厚生労働省の女性医師キャリア支援事業の委託も受けたことから、原めぐみ先生（佐賀医大13期生、社会医学講座准教授）、増岡美穂先生（同19期生、特任助教・皮膚科医）ならびに荒木薫先生（同22期生、特任助教・小児科医）が中心となり活動しています。もちろん、こうした活動は、宮崎学長や後藤理事、原学部長、山下病院長をはじめ多くの皆さんのご支援があつてのことです。

多様性が生まれるとどうなるのでしょうか？

例えば医療の現場では、患者さんの医学的な課題だけでなく、社会的な背景などを十分に理解し納得のいく医療を提供していく必要があります。「多角的な視点で患者さんを診る」ことは簡単な事ではありません。多様な



ランチミーティングにて

マイノリティ（少数派）と呼ばれる集団の要素は、性的指向・民族・国籍・宗教・年齢・障がいなど多様ですが、女性の占める割合が大きいです。現在、活

バックグラウンドをもつ医療スタッフが揃っていれば、対応できる患者さんの幅がグッと広くなりますし、理解を深めることに繋がります。これも何も医療に限ったことではありません。異なった考えの持ち主が集まること、お互いを理解し合うのにもいろいろな意見の交換する必要性が高まります。似たような環境にいると、考え方も単一化して新しい視点が生まれにくくなるといえます。多様な背景のスタッフ間ではコミュニケーションに工夫も必要ですが、そのおかげで事実への理解が深まり、ミスを防げる

活動の対象は女性だけでしょうか？

日本は、男女格差指数（Gender Gap Index）が非常に低い、つまり男女の格差が大きいことで世界的に有名です。（編者注：世界経済フォーラムが「The Global Gender Gap Report 2016」において公表した日本の順位は、144カ国中111位であった）最近こうした数字は少しずつ知られてきましたが、どういう意味があるとお考えになるでしょうか。私が国際学会に参加すると、欧米の研究者から男女問

わす、「日本は経済的に発展しているのに、なぜそれほど女性の社会的地位が低いのか理解できない」とか、「あなたはそんな差別的な国でいったいどうやって教授になれたの？」などと言われるのは珍しくありません。現代では、女性の社会進出が進んでいると思いがちですが、上位職はほとんど男性で占められています。いろいろな場で男女共同参画の考え方に触れて理解をしても、家庭内では従来の考えのまま、家事や育児・介護は女性の仕事だと男性も女性も考えられていることが多いと思います。やはり、自分から家事を分担しようという男性はまだ少ないでしょうし、「家事や育児を手伝う」と表現されるように、家庭内での仕事は、男性にとって主体ではないと考えている人が多いのではないのでしょうか。性別役割分業制の家庭で育った子どもたちは、それを当たり前と捉えてしまうので、家庭が性的差別の再生産の場になっているとも言われています。そうした課題に対しては、とても複雑で微妙な、また多様な考え方があり、それぞれの幸せなスタイルは皆異なっていると思います。けれども教育研究の場では、性別やその他の背景にかかわらず力を発揮できるように環境を皆で作る必要があるんじゃないでしょうか。いろいろな課題があるんだということも理解してもらいたい。一つには決定権を持つメン

バーの中に、女性がある一定以上の割合を占めることも大切だと考えられており、それが故に女性比率が組織の評価基準の一つになっています。医学科の女性教授も、もっと増えたいと思っています。また、佐賀大学の学生を対象にした調査によると、「管理職になりたい」と答えた割合が非常に少ないことが分かりました。職位を上げ、決定権を得ることは理想の実現への近道です。気持ちよく働きながら研究し、皆の役に立つ成果を上げることは、とてもやりがいがあり、知的好奇心も満たせる楽しいことです。ぜひこのことを知って挑戦してもらいたいですね。

これまでにどのような活動がなされていますか？

佐賀大学医学部附属病院には保育園が併設されており、病児保育は比較的に早期に実現されています。また、研究環境の整備として、育児中の女性研究者に研究補助員を配置し、仕事と家庭を両立しやすい環境づくりを進めているほか、多様性への意識を啓発する講演会や、中高生への働きかけとしてオープンキャンパスでのイベント活動も毎年行っています。本年6月には、学長直轄のダイバーシティ推進会議も設置されました。ぜひSAGAJOYをご覧ください。ぜひダイバーシティ推進にとって重要なことは、多様性を実現するには、人を「属性」（性別、肌

の色、出身高校や大学、出身地など）で見るとはなく、その人自身をきちんと評価することが大切です。属性は客観的に判断できませんが、為人（ひととなり）は主観的なものも含まれますし、価値観で大きく異なってくる場合もあります。人をどのように評価するのは永遠の課題と言えるかもしれません。

就職などに関し、不安や悩みを持った学生はどうすれば良いでしょうか？

ぜひ本庄キャンパスのキャリア支援センターやダイバーシティ推進室を利用して下さい。また、医学部では月に1回、解剖学教室の事務室でランチミーティングを開催し

ています。気軽に参加しているいろいろな考え方に触れてほしいと思います。人生は山あり谷ありで、本当にいろいろな事が起こると思っていますが、どのようにならざるを得ない行動は全く変わってきません。興味のある学生さん

柴田健太郎

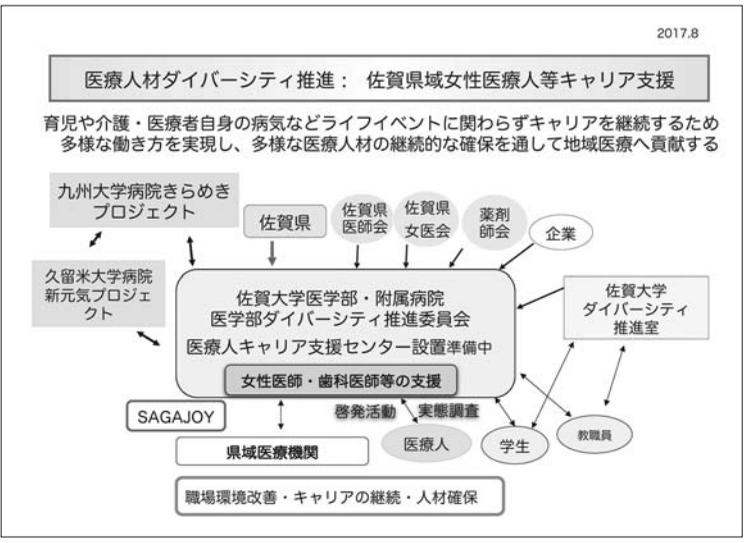
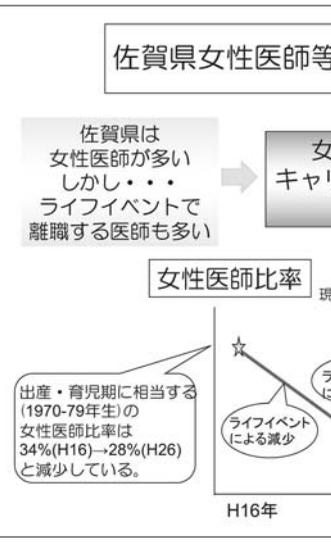


この色、出身高校や大学、出身地など）で見るとはなく、その人自身をきちんと評価することが大切です。属性は客観的に判断できませんが、為人（ひととなり）は主観的なものも含まれますし、価値観で大きく異なってくる場合もあります。人をどのように評価するのは永遠の課題と言えるかもしれません。

佐賀県は女性医師が多いしかし、ライフイベントで離職する医師も多い

女性医師等キャリア支援制度の充実

佐賀県医師確保さらに質の高い医療の提供



第56回 九州・山口医科学学生体育大会成績

主管校：鹿児島大学 開催期間：平成29年3月11日～5月28日

Table with 4 columns: 参加サークル名, 種目, 結果, 出場校数. Lists various sports events and their outcomes.

第69回 西日本医科学学生総合体育大会成績

主管校：山口大学 開催期間：平成29年8月7日～8月20日

Table with 4 columns: 参加サークル名, 種目, 結果, 出場校数. Lists various sports events and their outcomes.

九山・西医体

結果報告



バドミントン部の皆さん



熱戦の様子

第51回 全日本医科学学生体育大会王座決定戦成績

主管校：信州大学・山口大学 開催期間：平成29年8月22日～9月24日

Table with 4 columns: 参加サークル名, 種目, 結果, 出場校数. Lists badminton tournament results.

オープンキャンパス見聞録
Aさん 8月10日に、佐賀大学のオープンキャンパスがあったんだって？
B君 そうそう、その日は取材のために佐賀駅からバスで医大に向かったんだけど、車内は見慣れない制服姿の高校生でもうずし詰めた状態。結局立ちっぱなしだったよ。
Aさん 何となく嬉しそうね。そういえば、私も高校生の頃に行っちゃった、どれぐらいの人が集まったのかな。
B君 学生課で聞いた話では、佐賀大学全体の参加者が約6千5百名、鍋島キャンパスが約1千4百名だったって。医学部だけで去年より約80人増えたらしいよ。見た限り

トの第3弾で、すでに平成26～28年にかけて「教師へのとびら」、「科学へのとびら」が開始されています。
これまで行われてきた「出前授業」といった高大連携活動は基本的に単発であり、高校生の興味・関心の高まりが一過性のものになってしまいう恐れがありました。本プロジェクトでは3年間にわたって、講話や体験学習、グループ討論など計6～7回のプログラムを定期的に開催します。参加者は目標設定や振り返りを行い、その記録をポートフォリオとしてまとめることで、自身の成長を客観的に把握しつづ

「医療人へのとびら」がスタートしました！
8月6日の日曜日、看護学科棟講義室において、医師を目指す佐賀県内の高校1年生53名を対象に「医療人へのとびら」の第1回プログラムが開催されました。これは本学と佐賀県教育委員会や県内の高校が連携して実施する「とびらプロジェクト」の第1回プログラムが開催されました。これは本学と佐賀県教育委員会や県内の高校が連携して実施する「とびらプロジェクト」の第1回プログラムが開催されました。これは本学と佐賀県教育委員会や県内の高校が連携して実施する「とびらプロジェクト」の第1回プログラムが開催されました。

では女子学生やその親御さんが多かった感じだね。Aさん 看護学科はもちろんな、医学科も女子の人数が高いつて聞くものね。B君 そうそう、胸骨圧迫法、在学生によるキャンパスライフ何でも相談、高齢者体験、子供体験、血圧測定・聴診器の使い方。
Aさん それって、お世話するほうも大変じゃない？
B君 ホントに「お疲れ様」だと思っよ。特に学生ボランティアの数が例年より少なかったようだし。
Aさん そういえば、直前までボランティアを募集してたわね。来年は私も参加してみようかな。(岩永)

もやっぱり高校生だよ。感想を聞いてみたら、「とても緊張しました」だって。Aさん 他のコーナーもあったんでしょ？
B君 そうそう、胸骨圧迫法、在学生によるキャンパスライフ何でも相談、高齢者体験、子供体験、血圧測定・聴診器の使い方。
Aさん それって、お世話するほうも大変じゃない？
B君 ホントに「お疲れ様」だと思っよ。特に学生ボランティアの数が例年より少なかったようだし。
Aさん そういえば、直前までボランティアを募集してたわね。来年は私も参加してみようかな。(岩永)

今回の「医療人へのとびら」は、高校3年間、大学6年間の9年間で未来の医師を育てようという発想に立っており、地域の医療に貢献できる良き医療人の育成を目指しています。記念すべき第1回は原医学部長の挨拶に引き続き、「医療の最前線」と題して高度救命救急センターの阪本雄一郎センタール長による講演が行われ、新たにスタート

新聞編集委員
倉岡晃夫教授(編集長)
河野史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手(副編集長)、大野渚、西原歩美、藤田真衣(医6)、岩永鴻之介、陣内一輝、吉岡瑞姫(医4)、林田寛之(医2)
要望などの連絡先
学生課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp

編集後記
休日の昼下がり、俳優の小日向文世さんが、テレビ番組でその半生記を語っていた。同じ劇団員を伴ったというエピソードに、司会者からこんな質問が飛んだ。「劇団という、いろいろな仕事がありますから、なんとするか、総合力」というのが見えてきますよね。それが決め手になったんじゃないですか？
小日向さんは「まあ、そうですね。笑って受け流していたが、私はハツとした。学生時代に所属していた音楽サークルのことを思い出したから。コンサートもやってきたから意外といろいろな雑務をこなさねばならず、今思えば確かに総合力(人間力)と言いたいです。(倉岡)

れました。攻めの医療プログラム(レホスピタル)・集中治療・災害医療を三つのテーマとして、医療現場の写真を織り交ぜた臨場感溢れる内容に、参加した高校生たちは大きな興味を抱いたようです。質疑応答では多くの質問が寄せられていました。
高校の枠組みを超えて、同じ志を持った仲間たちとコミュニケーションをとれることも、このプログラムの良さかも知れません。将来、彼らの中から医療を背負って立つ仲間が誕生することを期待したいと思います。来年は看護師志望の高校生を対象とするプログラムも開始され、医学部在生との交流会も企画されているようです。皆さんもぜひ参加してみてください。(陣内)